

介護施設におけるインクルーシブデザインに基づく コミュニケーションツールとケアプランの改善と検 証の研究

李, 允圭

<https://hdl.handle.net/2324/7396246>

出版情報 : Kyushu University, 2025, 博士 (芸術工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名：李 允圭

論 文 名：介護施設におけるインクルーシブデザインに基づくコミュニケーションツールとケアプランの改善と検証の研究

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

少子高齢化は、世界的な年齢構造の変化を背景とする深刻な社会的課題であり、各国の経済的・社会的発展に大きな影響を及ぼしている。特に日本、韓国、ヨーロッパ諸国では、高齢者ケアに対する社会的需要の急増が顕在化しており、その対応は喫緊の課題である。

日本では、家族扶養構造の弱体化を受け、政府および自治体が高齢者ケアの一部を介護施設に委譲してきた。これらの施設は、身体的・認知的機能の低下や慢性疾患を抱える入居者に対し、専門的支援を提供する重要な役割を担っている。

しかし、施設内では高齢者とのコミュニケーションに関する困難が多く報告されており、効果的なケアを行うためには、入居者の個別的なニーズを的確に把握し、対応するためのコミュニケーション戦略と専門的スキルが不可欠である。

このような社会的背景とニーズを受け、平井らは 2014 年 COI ビジョン「少子高齢化先進国としての持続性確保」研究のなかで、QOL 及びウェルビーイングの向上を図ることを目的に、ケア管理のコミュニケーションツールである「ライフマップデザインツール Life Map Design Tool」(以下、LMDT)の開発を行った。しかし、従来の研究結果に対する追跡評価および追加研究の不足は、成果の信頼性と普遍性を高める上での制約要因となっている。追跡研究の欠如は、結果の一般化や有効性の検証に限界をもたらし、学術的貢献度および実用的活用可能性を制限する恐れがある。したがって、本研究では、介護施設における実証的アプローチを通じて、研究成果の再評価および応用可能性の拡張を試みている。

また、介護施設における高齢者の QOL およびウェルビーイングの向上を目的とし、段階的かつ実践的な研究構成を採用している。方法論としては、「デザインによる研究 (Research through Design: RtD)」を基盤に、実際の施設利用者や介護者とともに、課題抽出からツール開発・検証に至るまでのプロセスを一貫して構築している点に特徴がある。

第 1 章では、研究の背景・目的・対象領域・方法・構成を明示し、3 項目を研究の「リサーチクエスション Research Question」(以下、RQ) として設定する。(RQ1) LMDT と従来のケアプランを調査し、コミュニケーションの質にどのような効果の差があるのかを比較する。

(RQ2) LMDT と従来のケアプランを調査し、生きがい意識にどのような差があるのかを比較する。(RQ3) LMDT と従来のケアプランを調査し、新規ケアプランの策定にどのような肯定的影響の差があるのかを比較する。

第 2 章では、QOL の理論的枠組みとして WHOQOL-4 と PWB (心理的ウェルビーイング) モデルを統合的に提示し、身体的側面だけでなく、心理的・社会的側面に注目した概念的分析を通じて、対象とする評価尺度の明確化を図った。

第 3 章では、既存の介護コミュニケーションの構造とその限界を明らかにし、回想法を含む心理的アプローチや個別化ケアの有効性を示すことにより、新たな介入の必要性を論じている。その特徴として、対象者の回想を中心としたコミュニケーションによって「心理的安定感」を与える効果があること、および視覚的要素を活用することで「高齢者の発話」を促進する点が確認された。

第4章では、既存のデータ（当時の記録紙および責任研究者へのヒアリング）を活用し、RtDアプローチを適用して実践と研究を連関させ、開発のプロセスを見直した。LMDTの開発過程では、インクルーシブデザイン手法を活用し、4回のワークショップを多様な関係者が「共感」を基盤にナラティブ(物語)を引き出し、最初から共にコ・デザイン（共創）を行った。この過程を通じて、介護施設内の目標が単なる「機能的解決」にとどまらず「安心・安全、利便・適応、心地・感動」という感性の三軸を考慮したプロセスに基づき、「高齢者のQOL向上」においてより重要な利用者と共に「アスピレーション」を見出し、それを解決するプロセスの重要性が確認された。

第5章では、LMDTの介入効果について、「ホールデン・コミュニケーション尺度」と「生きがい意識尺度」を用いて定量的に検証し、事前・事後の比較によって有意な変化が確認され、3つのRQ観点から結果を提示する。

まず、RQ1の「コミュニケーションの質」では、HCS尺度において第1回($t=7.512$, $p<.001$)、第2回($t=2.282$, $p<.05$)ともに有意な改善が確認され、LMDTの導入により高齢者の会話や表現が活性化し、対人関係の質が向上した。

次に、RQ2の「生きがい意識」では、Ikigai-9において第1回($t=-12.162$, $p<.001$)、第2回($t=-3.404$, $p<.01$)で有意な向上が見られ、目的意識や内的動機づけの高まりが心理的安定や社会的孤立の緩和につながった。

最後に、RQ3の「新規ケアプランの策定」では、入居者の経験や価値観を反映した個別性の高いプランが実現し、自己決定感と生活の充実感が促進された。

以上の結果から、LMDTは従来のケアを超えて、高齢者のQOLおよびウェルビーイングの向上に寄与する有効な支援ツールであることが示された。さらに、本研究の成果は、福祉分野・心理分野において提供者と利用者の円滑な相互作用を支援するコミュニケーションツールとしての可能性を示している。

一方で、本研究は日本国内の1施設・少数の被験者に限定されたため、結果の一般化には限界がある。今後は複数施設を対象とした継続的・縦断的研究により中長期的効果を追跡する必要がある。また、LMDTに特化した評価尺度の開発や、高齢者の心理的・社会的側面に適合したQOL・ウェルビーイング評価モデルの構築が重要な課題である。